



VOL.41

タイヤの交換の タイミングっていつ?

このコーナーではクルマに関する
知になる雑学をご紹介します。
意外と知らないことがあるかも!?



みなさんはどのようなタイミングでタイヤを交換をしていますか？
車検の際や、スタッドレスタイヤから夏タイヤへの交換の際に
「そろそろ交換した方が良いでしょう」と言われ交換したり、あきらかに
タイヤが摩耗した状態になったときに、交換するタイミングと判断する
方も多いかと思いますが。
摩耗したタイヤで走行するのは危険なので、タイヤ溝が無くなってきた
＝交換時期というのは間違っていないです。しかし、タイヤ溝さえ残って
いればまだまだ交換しなくても大丈夫と考えるのは間違いです。
今回は正しいタイヤの交換時期について考えていきましょう。

1

摩耗の状態による交換時期の判断

タイヤの溝が無くなってしまうと、雨の日に走行するときに排水ができなくなってしまうため、ハイドロプレーニング現象を引き起こす可能性が高くなります。ハイドロプレーニング現象とは、水の溜まった路面などを走行中に、タイヤと路面の間に水が入り込み、摩擦力が失われること。路面からタイヤが浮いてしまい、制御できなくなる現象です。

タイヤには、溝の深さが1.6mm以下になったことを知らせる、スリップサインというものがあります。スリップサインは、タイヤの側面にある三角マークのところにあり、溝の深さが1.6mm以下まで摩耗した際にスリップサインが出る仕組みになっています。道路運送車両法では、タイヤ溝の深さが1.6mm以下になったクルマを公道で走らせてはいけないことになっており、車検も通りません。1.6mm以上あるタイヤであれば、公道を走っても問題ないのですが、メーカーではタイヤ溝が4mm以下になったタイミングでの交換を推奨しています。4mm以下になると急ブレーキをかけた際のクルマが停止する距離が、新品のタイヤと比べてかなり変わってくるので、4mm以下になったら交換をするタイミングといえそうです。



タイヤのひび割れが多いと、ひびからタイヤ内部に水が入り、内部のスチールワイヤーが錆び、タイヤの強度が下がります。



2

製造年数での交換時期の判断

毎日あまり走行しない方であれば、タイヤ溝も減るのが遅くなります。

しかし、実はタイヤにも消費期限があります。タイヤはゴムで作られているために、どうしても時間とともに劣化してしまいます。ワイパーのゴムが、あまり使っていないくとも時間とともに硬化して劣化してしまうのと理屈は同じです。一般的には、タイヤの消費期限は製造から4年～5年といわれており、溝が十分に残っているタイヤであっても、製造から5年以上経過しているタイヤは交換したほうが無難です。

また、目で見てタイヤ表面にあきらかにひび割れなどがある場合も交換時期となります。

5年以上経過していなくても、クルマを保管している場所が、雨風や直射日光が強く当たる場所であったり、タイヤの質によって早い時期でひび割れしてしまうこともあります。ひび割れや消費期限切れのタイヤは、走行中にバースト（破裂）のおそれもあるため、交換時期といえます。

3

タイヤの情報を把握しておこう！

タイヤ溝やひび割れは、タイヤの外観から知ることができ、タイヤ販売店やクルマ屋さんで相談することができます。ですが製造年数はよくわからないといった方も多いかと思いますが。

実は右記写真のように、タイヤに刻まれている製造番号から製造年を知ることができます。右の写真には「3523」と書かれており、この場合は「2023年35週目の製造」のタイヤとなります。つまり2023年8月27日～9月2日頃製造されたタイヤだとわかり、今現在からおよそ2年弱経過していることがわかります。

タイヤは、ゴム質の柔らかいものと硬いものがありますし、乗り方によってもタイヤの減り方は大きく変わってきますので、走行距離によってどれくらいの割合で減っていくのかを単純に判断することはできません。ただ、一般的には5千km走行するごとにタイヤは1mmずつ減っていくと言われてしますので、これを1つの目安にすることはできます。

新品のタイヤの溝は8mmほどありますので、メーカーが交換時期として推奨する4mmまで減るのは2万km、4mm以下になるのは2～3万km走行した時と単純には計算できます。ある程度の走行距離を走ったら、こまめにチェックすることをオススメします！

